

3日 火曜

黙示録



8:1 子羊が第七の封印を解いたとき、天に半時間ほどの静けさがあった。

8:2 それから私は、神の御前に立っている七人の御使いたちを見た。彼らに七つのラッパが与えられた。

8:3 また、別の御使いが来て、金の香炉を持って祭壇のそばに立った。すると、たくさんの香が彼に与えられた。すべての聖徒たちの祈りに添えて、御座の前にある金の祭壇の上で献げるためであった。

8:4 香の煙は、聖徒たちの祈りとともに、御使いの手から神の御前に立ち上った。

8:5 それから御使いは、その香炉を取り、それを祭壇の火で満たしてから地に投げつけた。すると、雷鳴と声のとどろき、稲妻がひらめき、地震が起こった。

8:6 また、七つのラッパを持った七人の御使いたちは、ラッパを吹く用意をした。

8:7 第一の御使いがラッパを吹いた。すると、血の混じった雹と火が現れて、地に投げ込まれた。そして地の三分の一が焼かれ、木々の三分の一も焼かれ、すべての青草も焼かれてしまった。

8:8 第二の御使いがラッパを吹いた。すると、火の燃えている大きな山のようなものが、海に投げ込まれた。そして海の三分の一が血になった。

8:9 また、海の中にいる被造物で、いのちのあるものの三分の一が死に、船の三分の一が壊された。

8:10 第三の御使いがラッパを吹いた。すると、天から、たいまつのように燃えている大きな星が落ちて来て、川の三分の一とその水源の

上に落ちた。

8:11 この星の名は「苦よもぎ」と呼ばれ、水の三分の一は苦よもぎのようになった。水が苦くなったので、その水のために多くの人が死んだ。

8:12 第四の御使いがラッパを吹いた。すると太陽の三分の一と、月の三分の一、また星の三分の一が打たれたので、それらの三分の一は暗くなり、昼の三分の一は光を失い、夜も同じようになった。

8:13 また私は見た。そして、一羽の鷺が中天を飛びながら、大声でこう言うのを聞いた。「わざわざいだ、わざわざいだ、わざわざい来る。地上に住む者たちに。三人の御使いが吹こうとしている残りのラッパの音によって。」

第七の封印には7つのラッパの出来事が込められていました。一つの封印に7つの災害があったのです。終わりの日の患難がどれほど大きなものであるかが分ります。

このラッパは一個のトランペットのような楽器と見る必要はないでしょう。ヨハネは幻を見、それをことばで表しているのです。実際に起こる出来事は私たちの想像をはるかに超えたものでしょう。しかし、主の患難は必ず来るということは、肝に銘じておく必要があります。

この患難のきっかけは「香炉を…投げつけた」ことによるものですが、この香炉の煙は聖徒の祈りであると書かれています。私たちの祈りが終わりの日に用いられることも知りましょう。

私たちの祈りは、愛のとりなしや解決を求める願いなど、色々あるでしょうが、どれも空を打つようなものでもなく、また空しく消えるものでもなく、天のみわざを動かすほどの力あるものであるということが分ります。この黙示録のことばは真実なものですから、これをいつも覚えて、祈り

の力を実感しながら、力ある祈り手となりましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

